

翻訳といっても所詮は英語です。英語を勉強せずして何を勉強しますか。というわけで、作家、サマセット・モームのエッセイの一部を引いてきました。克明な解説をつけますので、まずご自身で訳してから以下を読まれることをお勧めします。

It is salutary to realize the fundamental isolation of the individual mind. We have no certain knowledge of any consciousness but our own. We can only know the world through our own personality. Because the behaviour of others is similar to our own, we surmise that they are like us; it is a shock to discover that they are not. As I grow older I am more and more amazed to discover how great are the differences between one man and another. I am not far from believing that everyone is unique.

【解説】

①It is ②salutary ①to ③realize ④the fundamental isolation of the individual mind. We have ⑤no certain knowledge of any consciousness ⑥but our own. We can ⑦only know ⑧the world through our ⑨own ⑩personality. ⑪Because the behaviour of others ⑫is similar to our own⑪、we surmise (that ⑬they are ⑭like us)⑮;①it is a shock ①to ⑯discover (that ⑰they are not).⑱As I ⑲grow older/ I ⑳am more and more amazed to discover (how great are the differences between ㉑one man and another). I am ㉒not far from ㉓believing (that everyone is ㉔unique).

注：//は文の区切り。()は読むひとかたまり。

①it ~to の構文。

②=healthy, useful。「健全な」「有益な」(ラテン語の *salus* 「健康」から)とおおかたの辞書にあるが、ちょっとつかみにくい。こういうときは英英辞典が頼りになる。

A salutary experience is good for you, even though it may seem difficult or unpleasant at first. (*COBUILD*)

なるほど、「ためになる」という語感なのですね。

③事実を事実としてしっかり認識すること「はっきりと理解する」

④mind 「(肉体に対する)精神」 cf. heart 「感情面での心、気持ち」。of...は所属(…が持つ、に属する)。「直訳」<個人の精神の根源的な孤立> →<硬めの訳> 「個人の精神が根本において独立したものであること」 →<軟らかめの訳> 「ひとの心は元々他(人)とは全く別のものだ...」

⑤certain(=sure) knowledge が no(=not any) と読む。of...は関連を示す。「(of 以下についてのはっきりとした知識を全然持たない) → 「よくわからない」。certain は叙述用法(補語となる)で「確かな」、限定用法(名詞を修飾する)で「ある...」と習うが、限定用法でも場合により(特に前に no、数詞、my などの所有代名詞がくると)「確かな」となり得る。

- ⑥but=except. our own のあとに consciousness を補って考える。own は形容詞だが、one's own の形で所有代名詞的(自分《自身》のもの)に働く。例：He has no car of his own. (彼は自分《自身》の車を持っていない)
- ⑦「(通して)のみ」only through と読む。know に掛け「知るだけ」とするのは、「知る」以上の重要な比較の対象が見えないので不可。
- ⑧形態的意味では「世界」、実質的意味では「世間」(文法的には普通名詞の集合名詞化)。このように、英語にはオモテとウラの意味がよくある。例：father：オモテ「父」、ウラ「先祖；神」、bloody：オモテ「血の」、ウラ「凄い」。ここではどちらをとってもよいが、文脈から推論する力と訳者のセンスが問われることがある。
- ⑨own は(1)所有(my own book わたしの本)、(2)自主性(This is a job of my own choice. わたし自らが選んだ仕事)、(3)独自性(It was his own opinion. それは彼独特の考えだった)の意味をもつ。「...自身の」ではわかりにくいことがあるのに注意。
- ⑩「(個人の本質的)性格、人となり」；「(哲学的)自我」
- ⑪文頭で従属節を導いて「...なので」(原因を説明する)。カンマは従属節が終わるしるし。
- ⑫「our own (behaviour)に似ている」
- ⑬=others
- ⑭前置詞「...のような」「...に似ている」
- ⑮節と節を同格で結ぶ(比較・対照・敷衍のしるし)。ここでは対照。
- ⑯「気づいて」「わかって」(「発見して」は大げさ)。ほかにも believe(信ずる→思う)、be proud of(誇りに思う→誉め《てあげ》たい)など、実際より重い意味をつけがちな単語に注意。
- ⑰they (others) are not like us
- ⑱接続詞「...につれて」
- ⑲「年をとる」だが、1歳から2歳になるのでも grow older(成長する)ということに注意(実はこの文章も作者S・モームが27歳のときのものである)。
- ⑳(discover して)「ますます驚く」。to は結果を示す(前に強い感情をあらわす語がきて)
- ㉑「彼我」。another は one と相関的に用いられ、別のひと(もの)の意。例：for one reason or another 「どういうわけか」
- ㉒婉曲表現(主として英国用法)で believing とイコールの関係を示す。(believing から)遠いことは決してない→ほとんど(believing に)同じ。cf. She is far from a fool. (決してバカではない→りこうだ)
- ㉓動名詞「信ずること」
- ㉔ユニーク、では原語との誤差がでる。「唯一」の意味がでるよう工夫する(例：かけがえのない、比類ない、独特、など)。

どうです。結構難しかったですでしょう。何気なく読んでわかった気になっていても、いざ

翻訳しようとする自分の理解のあいまいな部分が浮かびあがってくるものです。でも自信をなくすにはおよびません。こうした細かい読み方と内容だけつかんでどんどん読む方法、この2つを地道に積み重ねれば英文読解力はかならずつくものです。

●翻訳と英文和訳のあいだには深い溝がある

意味は正しく捉えられた人でも、日本語でうまく表現できないもどかしさを感じたのではありませんか。次の訳文などその代表例です。

個人個人の精神が根本においては孤立したものだを知ることは有益なことである。人間は自分の意識以外にひとの意識を確実に知ることはできない。自分以外の世間を知るのも自分の個性を通してしか知りようはない。われわれは、他人の行動が自分の行動に似ているからという理由で、その人たちが自分に似ていると憶測するわけである。似ていると思った人間が実は似ていないとわかることはショックである。私はだんだん年がふえるにつれて、人と人とのちがいが如何に大きいかを知ってますます驚いている。私は今、人間一人一人が類がないものだ信じかかっている。

問題点を見てゆきます。

<a 個人個人の精神が>根本においては孤立したものだ<知る b ことは有益なこと>である。人間は【自分の c 意識以外にひとの意識を確実に知る】ことはできない。d 自分以外の世間を知るのも自分の個性を通して d しか知りようはない。われわれは、他人の行動が自分の行動に似ているからという理由で、その人たちが自分に似ていると憶測するわけである。似ていると思った人間が実は似ていないとわかることはショックである。<私はだんだん e 年がふえるにつれて>、人と人とのちがいが如何に大きいかを知ってますます驚いている。私は今、<人間一人一人が f 類がない>ものだ信じかかっている。

(私の添削)

a 個人 b のは有益なこと c 意識は別にしてひとの意識を d 世間を知るのも/でしかありえない e 年を重ねる f 類まれな

(添削の理由)

a 「個人個人」は、「個人個人の心の中までは踏みこめない」「個人個人は互いに独立した存在である」のように、「個々」に焦点を当てるときに使うのが通例。ここのような、個人と全体(他人、世間)との対比を意識している場合には用いない。

b 「ことは...ことである」式の訳は、厳密性を貴ぶ種類の翻訳対象物についてなら必要悪として許されるかもしれないが、一般的な文章では読みにくくなるだけ。

- c 丁寧に訳したつもりなのだろうが、「以外に」と「確実に知る」とのコロケーションがおかしい。「以外に」を同様の意味内容となる別の言葉に替える。
- d 自分も世間の一員なのだから「自分以外の世間」という言い方はおかしい。「知るのも... 知りようはない」という表現は日本語にない。「知るのも」ときたら「...を通してである」となるのが日本語のコロケーション。
- e 増量剤でもあるのか？ 「年」は「重ねる」もので「ふえる」ものではない。
- f 「類がない」とは、それまでに見知った事例がないこと。人間一人一人が突拍子もないものに思えてしまう。